

## 高専在学時の職業イメージと卒業後の職務適応

Pre-conceived Ideas of Technical College Students about Their Work after Graduation and Their Adaptability to Their Employed Positions.

梅 野 善 雄

Yoshio UMENO

高専生の多くは、将来の技術者を目指して入学してくる。学年が上がるにつれ専門科目が増えることもあり、高専での学習では将来の明確な目的意識を持つことが必要不可欠である。実際、在学時に将来の職業イメージを持つ者ほど勉学に意欲的に取り組んでいる。しかし、卒業後の職務適応との関連性を見ると、このような者ほど職場での仕事には逆に強い不適応感を抱いている傾向が見られた。このことの原因について考察したい。

キーワード：高専生，勉学意欲，職業イメージ，職務適応

To learn in technical college, the explicit aims after their graduation are necessary for college students. The students, who had pre-conceived ideas about their work after graduation while in college, tended to accelerate their learning motivation in their college. However, they tended to lack adaptability to their employed positions after graduation. We shall discuss its causes.

Keywords: Technical College Students, Learning Motivation, Pre-conceived Ideas about Work after Graduation, Adaptability to Work

### 1. はじめに

工業高等専門学校では、中学卒業生を対象に5年間の一貫した技術者教育を行っている。卒業生の多くは製造業に就職して大学卒業生とも対等に活躍しており、産業界からの評価も高い。

著者は、これまで、高専生（本校）の学習に対する意識がどのように変化するかを入学直後から継続して調査してきた。その調査対象の学生達が卒業後に、在学時の意識と卒業後の職場生活との関連性を探ることにより、在学時の意欲を高めるための方策を見いだすべくアンケート調査を行った。その調査結果の分析から、卒業後の職務適応感と在学時の職業イメージとの間に意外な傾向が見いだされたので報告したい。

### 2. 調査方法と回収結果

調査対象は、昭和60年度に入学して平成元年度に卒業した本校卒業生137名である。記名式の郵送法で、卒業し

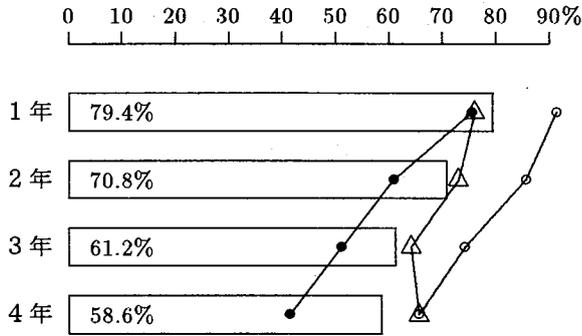
て4年目の平成6年2月下旬に調査票を発送した。未返送者には返送を督促する葉書を郵送するなどして、最終的に83名（回収率60.6%）から有効回答が得られた。回収率に学科（機械，電気，化学工学科）による差はみられず、在学時の状況にも未返送者との間で差は見られなかった。また、職場への満足感や人生観等にも、高専卒業生や青少年に関する従来の調査<sup>(1)-(7)</sup>と比べて特に異質な点は見られなかった。

### 3. 高専在学時の技術者志向

平成元年度の本校卒業生には、彼らが入学してから4年になるまで、記名式でいろいろな調査を行った。多くの者は、将来の技術者を目指して入学している。その思いが入学後にどのように変化するかを既報<sup>(8)</sup>よりまとめると、以下の通りである。

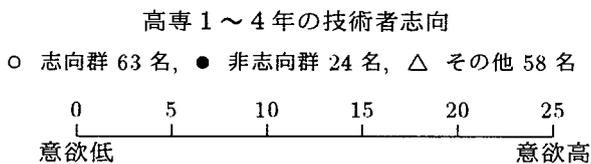
(1)入学時は大部分の者が技術者志向を持っているが、それは学年が上がるにつれ衰えていく（図1）。

将来の職業について自分なりのイメージが  
○ ある 35 名, △ ややある 67 名, ● ない 41 名



- 1) 「卒業後は技術者としての道に進みたい」に「そうである」と回答した者の割合。
- 2) 折線は1年入学時の職業イメージの有無別にみた技術者志向の割合。無答者2名あり。

図1 入学時の職業イメージと卒業後の技術者志向



複数項目をまとめて勉強しようという気持ちの強さを数値化し各学年でその平均を求めた。折線は、技術者志向の有無別にみた平均値。

図2 技術者志向別に見た勉強意欲の平均

- (2) 入学時に職業イメージを持つ者は学年が上がっても技術者志向を保持する割合が高い (図1折線)。
- (3) 入学後に技術者志向を維持した者は、学年が上がっても勉強意欲を高く維持している (図2)。
- (4) 4年在学時に将来の職業イメージを持つと思われる者は、勉強意欲も高く技術者志向も高い (表1「いいえ」の者)。

高専には、「技術者養成」という特定の目標がある。そのような学校で意欲を持って学習するには、個々の学生が卒業後の技術者志向を持つことが重要であることはいうまでもない。しかし、高専の5年間では、入学当初の思いが薄れる場合もあろう。自分の将来像として技術者

を志向しえなくなったときに、高専の学習に対する意欲が衰えていくのは自明の理と思われる。

表1 職業イメージと勉強意欲・技術者志向

将来の職業についてはまだ考えていない				
4年在学時	全体 145名	いいえ 56名	中間 41名	はい 48名
勉強意欲 の平均	19.8 (3.80)	20.8 (4.08)	19.9 (3.34)	18.4 (3.38)
技術者の道 に進みたい†	58.6%	71.4%	51.2%	50.0%

括弧内は標準偏差

†「そうである」と回答した者の割合

## 4. 高専卒業後の職場生活

### 4.1 卒業後の職場生活

アンケートへの回答 (有効回答83名) をもとに卒業生の職場生活を概観すると、以下の通りである。

- (1) 業種は製造業が75.9%、勤務先の従業員数は、500人以上が65.1%を占める。
- (2) 高専で学んだことは、職場における専門の基礎的素養としては56.6%が、実際に仕事を行う上では44.6%の者が役に立つと答えている。
- (3) 仕事内容は同期入社の大卒者と比べて81.9%の者は差がなく、72.3%は能力的な差も感じていない。
- (4) 回答者の85.5%は、職場で自分の考えが取り上げられたことがあり、61.4%は職場の上司から評価されていると感じている。

このように、平成元年度本校卒業生は大学卒業生と比べてもほぼ対等に仕事をこなしており、職場で十分活躍している様子がみてとれる。この結果は、関東工業教育協会の調査結果<sup>(7)</sup>とも符号している。

### 4.2 高専卒業時の就職先

この調査の回答者は、卒業時に83.1%が製造業に就職している。それは「卒業後は技術者としての道に進みたい」という問への回答の仕方にはよらない (図3)。

高専卒業生は即戦力として期待されている。しかも、製造業ともなれば、ある程度の工学的素養は必要不可欠であろう。技術者志向の薄いまま、したがって勉強にも意欲を持って取り組めないままそのような業種に就職することは、就職後に何らかの問題を生じるのではないだろうか。

卒業後は技術者としての道に進みたい（4年次）

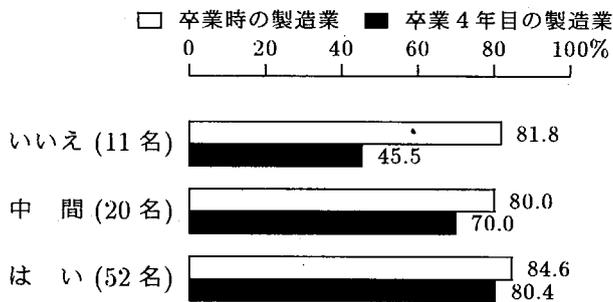


図3 技術者志向別にみた製造業の割合

卒業時の就職先と4年後の勤務先の業種を比較すると技術者志向の薄いまま製造業に就職した者ほど4年後にも製造業に勤める割合が低い(図3)。高専生のほとんど

までの5段階で回答を求めた。なお、その質問項目は、既存の調査結果<sup>9)</sup>にあるものを利用した。

その回答結果に対して多変量解析の因子分析を行い、仕事に対する適応感を表すと思われる因子を検出した。そして、その因子の構成項目(表2)の各回答にそれぞれ1~5点を与え、その合計点を仕事に対する適応感とした。その合計点は14~70点の範囲にある。この値が大きいほど今の仕事に良く適応して意欲的に取り組んでいることを、この値が小さいほどそうではないことを示していると思われる。この値は、表面的に仕事をうまくこなしているかどうかではなく、本人がその仕事にどのような思いで取り組んでいるかを表す尺度である。

全体の平均は45.4、標準偏差は11.2、合成得点の信頼性を表す $\alpha$ 係数は0.892であった。この得点を職場におけ

表2 職場における適応感の構成項目

A 毎朝、仕事に出かけるのが楽しみだ	14.4%
B 今の仕事は自分の興味・関心に合っている	44.5%
D 今の仕事にはやりがいがある	57.8%
F 毎日毎日の仕事に新鮮さを感じる	21.7%
G 今の仕事は、自分の心身を傾けて取り組む価値のある仕事だ	30.1%
L 今の仕事は、自分の能力に合っている	37.3%
N 今の仕事には積極的に打ち込めない†	19.2%
O 今の仕事を通じて喜びを感じたことがある	63.9%
P 仕事を通じて、いろいろなことを学んだり啓発されることがある	79.5%
Q 今の仕事の中では自分の創意・工夫が生かせる	51.8%
R 今の仕事は、自分の性格に合っている	38.5%
S 事情が許せば、今の仕事をさらに続けていきたい	41.0%
U 今の仕事を通して、自分が成長できると思う	49.4%
Y 今の仕事は、自分の将来のためになる	47.0%

†「まあそうである」または「まったくそうである」と回答した者の割合

†項目Nでは、「まったくそうである」を1点とした。

は製造業に就職するのでこれらの者達も卒業時には製造業を選択したのかもしれないが、就職時には自己の適性を良く考慮することが必要と思われる。

## 5. 職場における職務適応

### 5.1 仕事に対する適応感

平成元年度卒業生の仕事に対する適応感を表すと思われる尺度を作成するため、職場の中でどのような気持ちで仕事をしているかを25項目にわたって質問し、各項目について「全くそうではない」から「全くそうである」

る職務適応感とする。この値をもとに仕事に対する適応状況を3段階に分け、37以下を「不適応」(21名)、38~53を「中間」(42名)、54名以上を「適応」(20名)とした。

### 5.2 在学時の職場イメージとの関連性

高専在学時に将来の職業イメージを持つと思われる者(表1「いいえ」の者)は、在学時の勉学意欲が高く技術者志向も高い傾向が見られた。これらの学生は、卒業後の職場でも他と比べて職務適応感が高いのではないかと予想される。しかし、全く逆に、職場での仕事にはあまり適応できていない傾向がみられた(図4)。

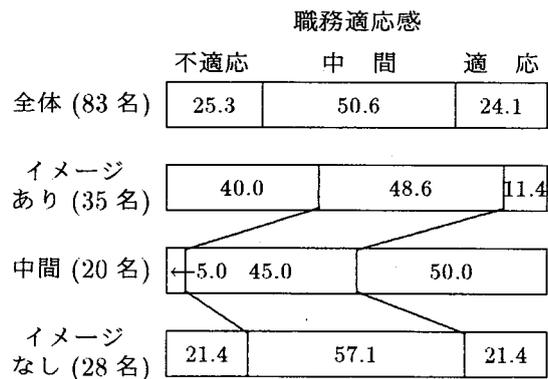
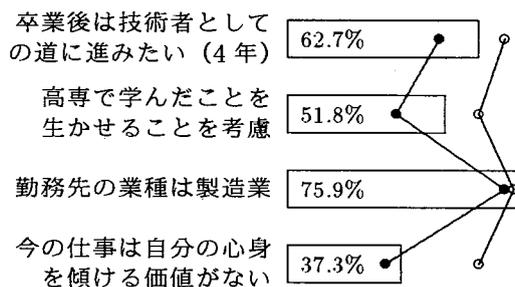


図4 職業イメージ（4年）別にみた職務適応感

将来の職業イメージが ○ ある 35 名, ● ない 28 名  
 0 20 40 60 80%



各項目に肯定的に回答した卒業生 (83 名) の割合。  
 折線は職業イメージの有無別にみた割合。

図5 職業イメージ（4年）別にみた他項目への回答

図5は、4年次の職業イメージの有無別に幾つかの項目を見たものである。職業イメージが「ある」者は在学時の技術者志向が高く、就職時にも高専で学んだことを生かせることを考慮して製造業に就職する者が多い。このことから、これらの学生が就職時に会社選択を誤ったとは考えにくい。「今の仕事は自分の心身を傾けて取り組む価値がない」を肯定する者も多く、これらの者の不適応の程度はかなり高いのではないと思われる。

### 5.3 卒業生の意見

図4の結果を確認すべく、在学時（4年次）の質問項目「将来の職業についてはまだ考えていない」に「そうではない（イメージあり）」あるいは「どちらともいえない（中間）」と回答した55名（これらの学生は、ある程度の職業イメージを持っていたのではないかと考えられる）について再調査を試みた。図4に対する意見を記述式で求めたところ、9名から回答があった。

逆の傾向が見られたことに「意外である」という感想

を述べた者は一人もおらず、「平成元年度の卒業生だけではない」「一般的な傾向だと思われる」「周りの人の話を聞くと同じ意見が多い」というように、この傾向に同意する者が多い。

代表的な意見は、「在学中にやりたい仕事のイメージを持っていた人は実際に就職したときのギャップが大きく、拒否反応を示すのではないのでしょうか。『将来の職業についてまだ考えていない』の人はそれだけ柔軟性があると思います。」というもので、就職後の「現実とのギャップ」に原因を求める者が多かった。

## 6. まとめと考察

平成元年度の本校卒業生を調査して、高専在学時に卒業後の職業イメージを持つことは在学時の勉学には好影響を与えているが、そのようなイメージを持つ者ほど卒業後の職場では逆に不適応の傾向が見られた。

実際、自分なりの職業イメージを持ち、その方向の職業につくべく十分考慮して会社選択を行ったとしても、就職後の配属先は会社側の判断による。入社数年後に、必ずしも自分の希望する仕事を任されるとは限らない。また、自分の希望する仕事を任されたとしても、それが在学時に自分のイメージしていたものであるとも限らない。現実の職場での仕事内容を、高専在学時の段階でどの程度イメージできたかも疑問に感じられる。

そのような場合は、卒業生の指摘するように、自分なりの職業イメージを持つ者ほど不適応感が強いのではないだろうか。「在学時の職業イメージと現実の仕事の間とのギャップ」が、このような不適応感を生じさせているように思われる。職業イメージを持つ者ほど「現在の仕事は自分の心身を傾けて取り組む価値がない」と回答する者が多いことも、このようなギャップがあることを裏づけているように思われる。

しかし、高専の学習年限は5年の長期にわたる。その間将来の技術者を目指して意欲的に勉強するには、ある程度の将来像をイメージすることはどうしても必要であろう。図4をみると、将来の職業に対するイメージの有無に対して、「どちらともいえない（中間）」と回答した者ほど職務適応感が高い。これらの者達は、将来像があるとも言えず、かといって無いわけでもない、漠然とした不明瞭な技術者像があるだけではないと思われる。方向性はあってもそれがあまり具体化していない者ほど実際の職場に適應できているというのは、十分納得できることであろう。

このように考えると、図4の結果は何ら意外なもので

はなく、むしろ一般的な傾向ではないかと思われる。高専生の多くは最初から将来の技術者を目指して入学してくる。この結果を見ると、そのような学生に、さらに将来の職業イメージを具体的に形成させるべく働きかける必要はないのではないだろうか。意欲を高めるための手だてとして進路指導的に将来の職業について考えさせることは、場合によっては卒業後の職務適応で逆効果となり得る場合がある事に留意する必要があると思われる。かといって、あまり勉学意欲の感じられない学生に「そんなことでは就職してから困るよ」と叱咤激励することを躊躇する必要はないであろう。その程度のことで学生が具体的な職業イメージを形成するようになるとは思われないからである。

## 7. おわりに

高専生の学習意欲を高める方策を探る目的での調査であったが、在学時に将来の職業イメージを持つ者ほど卒業後の職場では不適應感を持つ者が多いという結果が得られ、著者としてもとまどいを感じている。高専のような特定の教育目標を持った学校で、学生を教育することの難しさも痛感される。

この調査で見られた傾向について、実際の企業現場からのご批判・ご意見を頂ければ幸いである。

### 参考文献

- (1) 田村昭敏：国立函館工業高専における卒業生の職業意識等に関する調査報告書，厚生補導，48，(1970)

- (2) 斎藤寛治郎：高等専門学校学生の生活意識，厚生補導，101，(1974)
- (3) 河野隆頭他：高専における技術者教育の未来像，高専教育，8，(1985)
- (4) 総務庁青少年対策本部：青少年と活力，(1985)
- (5) 総務庁青少年対策本部：現代青少年の生活と価値観，(1986)
- (6) 梅野善雄：高専卒業後の職場生活，高専教育，11，(1988)
- (7) 関東工業教育協会高専教育委員会：企業における高専卒業生の評価，工業教育，40，5，(1992)
- (8) 梅野善雄：高専入学後の学業意識の推移と技術者志向，高専教育，14，(1991)
- (9) 日本リクルートセンター：リクルート調査総覧1980，企業内人事・教育編，(1980)



梅野 善雄

1974年 東北大学大学院理学研究科  
修士課程修了

現在 一関工業高等専門学校，一般教科助教授  
岩手大学工学部非常勤講師